

JHFREPORT



第22回FAIハンググライディングクラス1世界選手権より。P6からの報告をご覧ください。

朝日和博氏がFAIエアスポーツメダルを受賞

自作機での挑戦を原点に、日本のハンググライディング草創期よりフライヤー組織の立ち上げに尽力し、1982年からJHF会長等の役職を務め、教員として長年活躍してこられた朝日和博さんが国際航空連盟（FAI）エアスポーツメダルを受賞。9月20日（金）、東京都港区新橋の航空会館で行われた「空の日」航空関係者表彰式で、その受賞が伝達されました。

FAIエアスポーツメダルは「航空ス

ポーツに関連したFAI委員会業務、競技会運営、若年層の教育訓練等に顕著な功績や貢献があった個人または団体に贈られる賞」で、他の航空スポーツでは、熱気球の佐藤真一氏、グライダーの吉田正氏、ラジオコントロール機の上山憲一氏が受賞されました。

また、この表彰式で、2018年12月2日にオーストラリアで375kmを飛行し、パラグライダー（一般クラス）直線距離日本記録を更新した呉本圭樹さ

んに、日本記録証が授与されました。呉本さんは昨年の表彰式で「空の夢賞」を受賞、2年連続の登場となりました。



日本記録証を手にする呉本さん。

スポーツ倶



JHFレポートはスポーツ振興くじ助成金を受けて発行しています

JHFフライヤー宣言

1. 自分の意志と責任でフライトします。
2. 自己の健康管理を行い、健全なフライトをします。
3. 社会のルールを守り、第三者に迷惑をかけません。
4. 自然を大切にします。

上級タンデム技能証検定会を各地で開催中

JHF教員・スクール事業委員会 委員長 北野 正浩

検定会が各地でスタート

上級タンデム検定会が各地で始まりました。まずは9月3日(火)・4日(水)に北海道の赤井川・ニセコ・ルスツエリアで、続いて9月11日(水)・12日(木)には九州の阿蘇大観望エリアで開催しました。両会場とも、気象条件に恵まれ検定は順調に進みました。会場の準備や当日の運営を、地元の道・県連及びスクール・エリア管理者・クラブの皆様にご協力いただき、円滑に検定会を開催できたこと、感謝に堪えません。

このJHFレポートが皆さんのお手元に届く頃には、さらに多くの会場で検定が実施されている予定です。

タンデム証移行措置は来年3月まで

3月の第1回検定会の後、各地で検定会を開催するための準備を進めてきました。どの検定会で受検しても同じ基準で合否が決まるよう、チェック項目を明確に定め、採点基準の動画も作成しました。検定員は3名以上を配置し、そのうち少なくとも1名は同一の企業やスクールに属さない者に限ること、公平性を担保します。また、判定基準の統一や検定のノウハウ伝達のため、当委員会から検定員を1名以上派遣します。

従来のタンデム技能証をお持ちの方には、移行措置として2020年3月31日

まで有効な上級タンデム技能証をお送りしています。有効期限が切れると、下記のとおり同乗者が制限されますので、引き続き同乗者に制限のないタンデム飛行をする方は、上級タンデム検定を受けてください。

従来の「タンデム技能証」で同乗可能なパッセンジャー

1. パイロット証保持者
2. 同居の親族
3. 上級タンデム証を持つ教員／助教員の監督下で、フライヤー登録有効者の同乗も可能※

※事前に「上級タンデム技能証練習生」としてJHFに登録することが必要

北海道検定会

安全こそ最も重要と再認識

北海道ハング・パラグライディング連盟 理事長 木村 政樹

9月3日(火)・4日(水)、北海道での上級タンデム技能証検定会が青空の下で行われました。

今春、教員対象の検定会が関東で開催されて上級タンデム検定員が誕生して以降、各地に先駆けて北海道地区での開催となり、雪が降る前という北国の自然環境に配慮したJHFの決定に感謝しています。

風のコンディションを考えて選定した実技検定エリアは3か所でした。赤井川・ルスツ・ニセコの各関係クラブやスクールには、事前準備や練習日のエリア開放など受検者への様々な配慮に感謝します。

道内外からの受検者は12名。JHFから派遣された検定員は本州以南から3名、北海道連盟からはサポートスタッフとしてボランティア3名を配置し、安全でスムーズな検定ができるようそ

れぞれの立場で努力をしたと感じています。

1日目のソロフライト(離陸・ローリング・連続360度旋回2回・片翼折・ランディングアプローチと着陸精度など)とタンデム装備の点検はルスツエリアを、緩斜面でのスラローム(フロントライズアップ・リバースライズアップ)と学科講習は赤井川エリアを使用しました。

実技では風が強かったり方向が変わったりと、受検者はいつもより少し緊張をしたかもしれませんが全員の実技が完了し、学科講習会は夜8時まで頑張っ、この検定会に懸ける皆の意欲が感じられました。

2日目は、前日の検定に合格した半数の受検者のタンデムフライト検定が行われました。風の本流予報は北系で、いつテイクオフに対してフォローにな

るのかと気を揉み、弱く向きが変わるランディング場の風には気を集中したようですが、何とか弱いブローが味方してくれて、ギリギリでしたが全員の検定を終了できたのは幸運でした。

午後からは学科検定試験、その後の意見交換会では忌憚のない質問や意見が数多く交わされて、とても有意義な時間だったと感じます。

合否は公平公正を期するため検定内容をJHFに持ち帰り、教員・スクール事業委員会内で判断するそうです。

一人でも多くの方が合格することを願い、今後パラグライダーの安全・発展・普及に尽力くださることを期待しています。

アウトドアスポーツの普及には、安全が最重要であることを再認識し、今検定会に関わった全ての方々に心から感謝します。



実技検定の直前までスラローム練習をする受検者たち。



学科講習にも熱が入る。安全の重要性を再認識する。



受検者と関係者の皆さん。有意義な2日間だった。

検定の内容を公開

検定会では、機材確認、実技試験、学科講習、学科試験を行います。まずは機体、ハーネス、カラビナ、パラシュートといった機材の状態を確かめます。実技検定は、ソロ機でのショートフライト・高高度フライト、タンデム機での高高度フライトと、段階を踏んで実施します。学科講習ではテキストに基づいてタンデムのノウハウと事故防止のための知識を講義し、学科試験をします。

検定の内容は公開しており、実技については採点基準の動画で確認できますので、受検を希望される方はJHF事務局にお問い合わせください。検定に

合格した方には、3年間有効の上級タンデム技能証を発行します。

安全で確実なタンデム飛行を

上級タンデム技能証制度を導入した目的は、安全で確実なタンデム飛行の普及です。安心して同乗できるパイロットを認定するとともに、育成のための事業も順次展開していきます。

今後も各地で検定会の開催を予定しています。詳細が決まり次第JHFホームページに掲載していますのでご確認ください。これ以外に開催を希望される場合は、JHF事務局にお問い合わせください。

フォトコン締切を延期、お気軽にご応募ください！

第6回JHFハンググライダー・パラグライダーフォトコンテストの作品応募締切日を10月25日（金）に延期しました。

前回からプリントだけでなくデータ（10MB以内、jpg形式、メール送信可）での応募も受け付けています。スマートフォンで撮影した作品

も大歓迎。お気軽にご応募ください。
entry@jhf.hangpara.or.jp

賞金は最優秀賞（1作品）5万円、優秀賞（1作品）3万円、入選（数点）各1万円。入賞作品はJHFレポート次号に掲載。また、入賞作品等から2020年JHFカレンダーを制作します。詳細はJHFウェブでご確認ください。

県連だより1

■VRでハンググライダー体験

東京都ハング・パラグライディング連盟

今年も8月3日・4日の週末に、恒例となったイベント『東日本大震災復興支援熱気球イベント「空を見上げて」in 東京』が開催され、東京都連はハンググライダーのVR（バーチャル・リアリティ）を利用した体験会を開催しました。JAAから依頼を受けたJHFからの委託によるものです。

この体験会、例年は屋外でパラグライダーの人間によるトーイングや、ハンググライダーのスクータートーイングを使って実施してきました。しかし近年の高温化により、熱中症警戒情報が出ている中で屋外での長時間に及ぶ激しい活動は、参加してくれる子供たちはもとより、スタッフに健康上の危険が及ぶことを危惧し、屋内でのVRによる体験会実施を検討・提案し、今回初めての実施に至りました。VRによるハンググライダー体験は、東京工業大学葭田研究室にJHF（ハングパラ

振興委員会）が協力することで実現した仕組みで、論文発表もされています。

当日は世界の空を実際にハンググライダーで飛んで撮影した360度映像を使い、子供とご家族に楽しんでもらえたと思います。今回、会場建物の制約で実機を持ち込むことはできず、シミュレータを使用しましたが、他所での体験会では実機にぶら下がっての体験を実施しています。

VRによる体験は、現段階では「操縦」はできず映像だけで臨場感に欠ける部分はありますが、屋内で安全に実施することが可能です。ゲーム的な要素と



猛暑を避け屋内でVRによるフライト体験。

2019年度上級タンデム検定会

■北海道（赤井川・ルスツ・ニセコ）

9月3日（火）・4日（水）

5日（木）予備日

検定員：小林、山口、板垣

■九州-1（阿蘇・切株・湧水町）

9月10日（火）・11日（水）

検定員：小林、吉満、徳永

■九州-2（阿蘇・切株・湧水町）

10月5日（土）・6日（日）

検定員：小林、吉満、徳永

■北陸（獅子吼）

10月8日（火）・9日（水）

10日（木）予備日

検定員：山口、加賀山、殿塚

■東海-1（朝霧）

10月19日（土）・20日（日）

検定員：伊尾木、斉藤、加賀山

■四国（香川）

10月22日（火）・23日（水）

検定員：小林、角町、他1名

■東北（十分一）

10月28日（月）・29日（火）

検定員：福田、金井、塚部

■関東（足尾）

11月5日（火）・6日（水）

検定員：福田、板垣、佐藤

■東海-2（朝霧）

12月5日（木）・6日（金）

検定員：伊尾木、他2名

■東海-3（朝霧）

12月7日（土）・8日（日）

検定員：伊尾木、他2名

■近畿-1（紀ノ川）

12月10日（火）・11日（水）

検定員：山口、他2名

■近畿-2（紀ノ川）

12月14日（土）・15日（日）

検定員：山口、他2名

して受け止められる部分もあり、従来とは違った形で楽しんでもらえていると思います。夏のイベントは屋外で、といった声は今でもありますが、VRによる体験は天候等にも左右されずに少ないリスクで実施可能であり、これから様々なスポーツ体験の主流になってゆく可能性がありそうです。東京都連では今後、体験会の有力な実施手段の一つとして、VRによる方法も積極的に取り入れてゆきます。

重大事故を無くすためにインシデントを減らす

JHF安全性委員会 委員長 竹村 治雄

1 件の重大事故には 隠れた多数のインシデントがある

ハンググライダーやパラグライダーに限らず、すべての重大事故の背後にはそれより多くの小さな事故があり、それらの小さな事故の背景にはさらに多くのインシデント：負傷等には至らなかったもののヒヤリとしたことが隠れていると言われています。

1931年にアメリカのハーバート・ウィリアム・ハインリッヒが75,000件の労働災害のレポートをもとに調査を行いました。その結果、1件の重傷事故に対して29件の軽傷事故、300件の負傷を伴わない事故があると報告しています（図1）。

また、1966年にはフランク・E・バードが170万件の労働災害レポートを調査し、1件の重傷事故に対して10件の軽傷事故、30件の物損事故、そして600件のニアミスがあると報告しています（図2）。

これらの比率は調査対象によって異なるようで、必ずしもハンググライダーやパラグライダーの場合に当てはまるものではありませんが、重傷事故より多くの軽傷事故があり、それより多くの怪我を伴わないインシデントがあるというのは、経験的には正しいように思われます。

従って、重大事故を減らすためには、事故につながるインシデントを減らすことが重要であると言えます。インシデントを減らすには、様々なインシデントの情報を共有することも有効です。

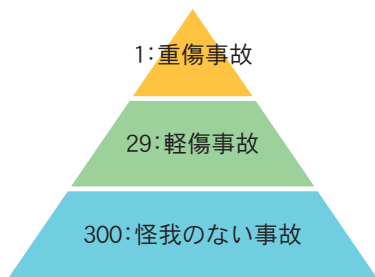


図1：ハインリッヒの
アクシデントトライアングル

インシデントを記録し その情報を共有する

スクール、エリア等でインシデントを記録することは、自分自身がインシデントを振り返る助けとなり、同じようなインシデントの発生を防ぐためにも有効です。

具体的には、インシデントの日時、天候や風などの気象条件、グライダーやハーネスなどの装備、インシデントの具体的な内容、考えられる原因、今後気をつけたいことなどを簡潔に記録すると良いでしょう。

このようなレポートをスクールやエリアで共有することで、お互いの安全への意識を高めることもできます。自分の失敗を記録したり、それを共有するのは気がひけるものですが、お互いの安全のためと考えて、進んで記録してください。

インシデントの情報がある程度蓄積すると、統計的な分析ができます。たとえば、プレフライトチェックを行った際に、レッグベルトに関係するミスがどの程度発生しているのか、ヘルメットの顎紐のつけ忘れはどうかなどについての分析が可能になります。また、事故報告と合わせて分析することで、私たちが犯しやすい過ちを見つけることができます。

BHPAの

収集インシデントの例

イギリスのハング・パラグライディング統括団体であるBHPA（British Hang Gliding & Paragliding Association）では、事故情報と併せ

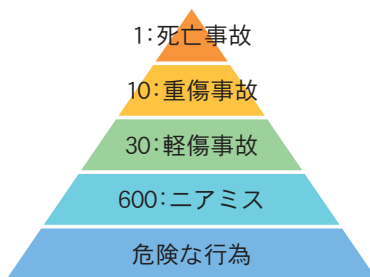


図2：バードの
アクシデントトライアングル

てインシデント情報をフライヤー会員に報告することをルール化しています。また、その内容を公開するとともに、数年ごとにインシデントの分析をしています。2016年～2018年の分析レポートによると、2011年には年間87件の報告があり、そのうち63件が怪我を伴うものだったのが、2018年には203件の報告があり、そのうち138件が怪我を伴うもので、報告件数が約2.3倍に増加しています。

これは、会員の増加とも関係しているようですが、怪我の有無にかかわらず、すべての報告を同一のフォーマットを用いてWEBで受け付けるようにしたことも関係があると分析されています。

報告のフォーマットには個人情報等が含まれますが、WEBで公開される内容からはプライバシー情報は削除されています。これらの報告の概要は、https://www.bhpa.co.uk/documents/safety/informal_investigations/ から確認できます。

【インシデントの事例1】

パラグライダーで、左側のブレークコードがライザーのプーリー部分に絡んだままテイクオフ、空中でグライダーが左に取られることから気がついて、体重移動で直線飛行を維持しながら、絡みを解いて対応した。原因は、1本前のフライトでランディングした際にからんだ状態でブレークトグルをライザーにクリップしていたようで、きちんとプレフライトチェックを行わずにテイクオフしたことだと思われます。

【インシデントの事例2】

ブレークラインの捻れがひどく、ブレークがつった状態となって、フライトをしてしまった。空中でパイロットは結び目ができていると判断して、そのまま体重移動で直線飛行してランディングした。実際には結び目はできておらず、空中でブレークトグルを離して撚りを戻せば回復できたと思われる。これは、プレフライトチェックに加えて、ブレークコードの撚り戻しを定期的に行うことが重要と思われます。

USHPAの

プレフライトチェックビデオ

以上のようなインシデントは、プレフライトチェックを徹底することで、ある程度防ぐことができます。

アメリカ合衆国のハング・パラ統括団体であるUSHPA（United States Hang Gliding and Paragliding Association）では、ハンググライダー、パラグライダーのプレフライトチェックを確実に行うことの重要性を示したビデオをYoutube で公開しています。ビデオのURLは下記のとおりです。

●パラグライダー

<https://youtu.be/ZJtwPvw7g3E>

●ハンググライダー

<https://youtu.be/VW8qZESnFvQ>

現在、JHFでは事故の目撃情報の収集を行っており、インシデントについても情報提供を呼びかけていますが、今後、安全性委員会での議論を経て、

事故・インシデントの情報収集にご協力ください

起きてしまった事故を二度と繰り返さないために、JHFでは安全性委員会が中心となって事故の報告をまとめ、フライヤー会員の皆さんに注意喚起する活動を続けています。

事故やインシデントを目撃したら、JHFウェブサイトの会員トップページから「事故情報収集ページ*」に入り、日時や場所、事故の状況などをわかる範囲で入力、送信してください。個人

さらに積極的なインシデントレポートの収集についても検討していきたいと思っています。

名を入力する必要はありません。

同様の事故を繰り返さないための情報集めに、ご協力をお願いします。情報を共有し事故ゼロを目指しましょう。

フライヤーが怪我をしていなくても、機体が壊れていなくても、ぜひお知らせください。

*事故情報収集ページ：JHFウェブサイト、会員トップページの左上に入口があります。

MPGフライヤーの皆さんへ

エンジンユニット出火防止のため確実な点検を！

JHF安全性委員会・補助動力委員会

9月2日（月）、モーターパラグライダーが飛行中、エンジンユニット部分から出火しエンジンが脱落する事故がありました。原因等は現在調査中です。同様の事故が起きないように、モーターパラグライダーでフライトされる皆さんに注意点をお知らせします。下記のチェックポイントを参考に、今一度、機材の点検をお願いします。

燃料関係のチェックポイント

- ☐ 燃料系パイプ等の接続部分で燃料が漏れていないか、接続は確実か
- ☐ 燃料ホースが劣化していないか
- ☐ 燃料ホースがエンジンと接触していないか
- ☐ 燃料ホースの接続部分はきちんとロックされているか
- ☐ 燃料タンクのキャップを閉めたか

燃料ホースには、経年劣化しても硬くなりにくくガソリン使用可能なシリコンチューブなど、メーカー指定のものを使用してください。ホームセンター等で売られているピンク色の燃料ホースを使用しているフライヤーを見かけますが、このホースは揮発性の高いガソリン用ではありません。

また、燃料ホースがエンジンに触れていると、燃料が漏れた場合に発火の

危険性があります。ガソリン漏れを起こしているところに電気系のスパークがあると引火することがあるので、十分に注意してください。

燃料タンクのキャップの閉め忘れはあり得ないと思われませんが、実はありがちな失敗です。再度確認されるようお願いします。

バッテリー関係のチェックポイント

- ☐ バッテリーの外形に異常はないか
- ☐ 使用許容範囲内に充電できているか
- ☐ メーカーの指定のとおり充電をしているか
- ☐ 突然の衝撃に耐えられるように、バッテリーが保護された状態で取り付けをされているか
- ☐ バッテリーを長期間保管する際、メーカーの指定する方法で行っているか

昨今のバッテリーは非常に高性能になっていますが、反面、取り扱いを誤るとバッテリー自身が発火します。

発火の危険性という点では鉛蓄電池が最も安全であり、ニッカド、リフェと続きます。リチウムポリマーは小型で高性能であるため愛用する人が少ないのですが、衝撃に弱く発火リスクの高いものです。

メーカーの指定に従って安全性の高

い二次蓄電池を使用することを推奨します。

また、充電や保管の方法は必ずメーカーが指定しているとおりにしてください。

配線関係のチェックポイント

- ☐ 配線の接続部分が抜けそうになっていないか
- ☐ 配線の途中に断線は無いか

配線部分には当然電気が流れており、短絡（ショート）すると火花が飛び、ガソリンに引火する恐れがあります。目で見ただけでは被覆内の損傷に気が付きにくいので、注意が必要です。

端子部分のコネクター、ハウジング周り、ハンダ付けされたところまで、細かく確認してください。

モーターパラグライダーのエンジンユニットは、取り扱い方法を誤ると非常に危険なものになります。

一般に、純正でない部品の使用やユニットの改造は、発火に限らずリスク要因となります。「自己流での整備や改造」をしないことを強く推奨します。疑問点があれば、メーカーや専門家のアドバイスを必ず得てください。

第22回FAIハンググライディングクラス1世界選手権 イタリアが6連覇を達成、日本は5位

7月13日-27日 イタリア Tolmezzo 報告：チームリーダー 浅井 将平

22回目のクラス1世界選手権がイタリア Tolmezzoにて7月13日～27日に開催され、日本代表として砂間隆司、太田昇吾、加藤実、田中元気、鈴木由路、佐野容子各選手、そして名草慧選手がオープンで参加しました。世界選手権は、各国代表6名のチームからなる国別総合及び個人総合で争われ、国別総合はタスク毎に各国上位3名の得点を計上しその合計点、個人総合は成立タスク全ての合計点の結果となります。12日間のコンテスト期間中、9タスクが成立し、全日程においてゴール者が出る条件に恵まれた大会となりました。



開会式に臨む日本チーム。右前から反時計回りに：名草、浅井、佐野、砂間、太田、加藤、岡田、鈴木、田中。



パイロットブリーフィング。本日のタスクが説明される。



Medunoからテイクオフ。今日は何人ゴールするのか？

Task 1 ● 86.3km

雲底が低く渋い条件。南側の稜線沿いを西に進み折り返すアウト&リターンのタスク。日本チームは鈴木17位、加藤21位、田中24位、名草25位、砂間33位の5人ゴールで国別総合4位につける。

Task 2 ● 135.8km

南側の稜線を西→東と進んだ後北上し、Tolmezzo西のTPを取って折り返すタスク。前日より好条件となる見込みだったがゴール率25%の厳しいレースとなった。Tolmezzo西の4つ目のTPが渋く、約30人の選手が100km地点付近でランディング。日本チームは鈴木20位、田中30位の2人ゴール。国別総合は5位に後退。

Task 3 ● 75.3km

午前中は高層雲が張り雲底も低かったため、平地を東に渡った後ゴールへ北上する短いタスク。午後は予報よりも条件が良くなり、100人近くの大量ゴールとなった。

日本チームは加藤22位、鈴木26位、太田36位、名草48位、砂間73位の5人ゴール。佐野がランディング時のアクシデントにより足を骨折し、残念ながらTask 4以降は棄権することになった。

Task 4 ● 143.4km

Tolmezzoの東側Gemonaからテイクオフし東西に走る稜線をスロベニアまで東へ、Tolmezzo南の谷まで折り返した後、平野の東のTPを取って折り返すタスク。日本チームは田中8位、鈴木13位、加藤16位、名草18位、太田34位、砂間36位の全員ゴール。

Task 5 ● 95.2km

雲底が低く、時間が経つに連れて南風が強まる予報。谷をジグザグと往復しながら北上するタスク。日本チームは加藤7位、砂間14位、鈴木31位、名草43位の4人ゴール。

Task 6 ● 75.6km

雲底は非常に低く1,500m程度の見込み。Gemonaからテイクオフし、平野を時計回りに一周するタスク。

ゴールエリア付近に雷雨が発生したためタスクストップとなった。タスク時間が規定に満たなかったためタスク不成立。

Task 7 ● 127.7km

雲底高めの好条件。Gemonaからテイクオフし北側のアルプスに入り第1TP、西の第2TPを取った後テイクオフ南側まで折り返すタスク。日本チームは鈴木12位、田中16位、加藤19位、太田43位の4人ゴール。



12位の鈴木由路。第18回4位大門浩二に次ぐ好成績。



日本チーム全員ゴール。過去最高の4位以上を狙いたい。

Task 8 ● 200.7km

今大会最長となる200km超えのビッグタスク。

Tolmezzo北のVal Seccaからテイクオフし、北上してGreifenburgテイクオフへ、その後はGreifenburgエリアを西→東と往復するタスク。

田中が今大会日本人最高位となる6位でゴール。日本チームは鈴木28位、太田39位、名草41位の4人がゴール。加藤はゴール直前までトップを独走していたが、残念ながら16kmショート。

Task 9 ● 95.1km

南～南西のリッジを西→東と往復するタスク。日本チームは田中14位、鈴木20位、加藤30位、砂間36位、太田45



個人総合表彰。アレックス、3度目のクラス1世界一。

位、名草74位の全員ゴール。

Task 10 ● 100.6km

大会最終日。Gemonaからテイクオフし、反時計回りに平野を回るタスク。日本チームは鈴木19位、田中27位、砂間31位、太田41位の4人ゴール。個人総合の最高位は鈴木選手の12位、国別総合は5位となった。

最後に、JHF、ハンググライディング競技委員会、HangAid2019、回収及びサポートとして同行していただいた岡田伸弘さん、皆様の応援、協力のおかげで、最後まで表彰、メダルを争う良い戦いことができました。個人総合では鈴木選手が歴代2番目の好成績とな



国別総合表彰。イタリアは他の追従を許さず中央に。

る12位を納め、また国別総合は5位となりました。この場をお借りして感謝とお礼を申し上げます。

成績

[個人総合]

1位	Alessandro Ploner	イタリア	8156点
2位	Christian Ciech	イタリア	8073点
3位	Primoz Gricar	ドイツ	7951点
12位	鈴木 由路		7060点
24位	加藤 実		6050点
26位	田中 元気		5977点
39位	砂間 隆司		5403点
48位	名草 慧		5066点
56位	太田 昇吾		4634点
120位	佐野 容子		404点
(Task 4以降は棄権)			

[国別総合]

1位	イタリア	24069点
2位	ブラジル	22097点
3位	ドイツ	21904点
4位	オーストリア	21077点
5位	日本	20818点

第16回FAIパラグライディング世界選手権

大健闘の日本チーム、遂に表彰台へ！

8月5日-18日 北マケドニア クルシェヴォ 報告：チームリーダー 岡 芳樹

海拔1410mのメインからテイクオフ

今回世界選手権の舞台となったクルシェヴォのエリアは、首都スコピエの南80kmに位置する。海拔600mの盆地の周りを海拔1400m程度の山脈が西・北・東側から取り囲んでおり、唯一南側に谷が開け、ギリシャまで続いている地形。少しコロンビアのロルダニージョに似ている。メインテイクオフは海拔1410mで東に面している。グライダーが5機横に広げられ、人工芝で覆われ、斜度も適当でテイクオフしやすい。サブテイクオフはメインから南に500mにあり、正面は西。こちらは機体が3機ほど広げられ、斜度は緩く風がしっかり入ってこないとし難い。幸いなことにサブテイクオフは一度も使用しなかった（西からの風が入ったときメインからではなくサブからテイクオフする選手が出たタスクは1回あった）。平野部はほぼ平らだが、と

ころどころに谷底から200～300mの丘があり、そこがサーマルトリガーになっている。

大会初日のチームリーダーブリーフィングで、GAPパラメーター：ミニマム距離4km、ノミナル距離60km、ノミナル時間1時間30分、ノミナルローンチ96%、ノミナルゴール30%が決定された。タスクコミッティにはIdris BIRCH（イギリス）、David OHLIDAL（チェコ）、Helmut EICHHOLZER（オーストリア）、セーフティコミッティにはPal TAKATS（ハンガリー）、Torsten SIEGEL（ドイツ）、Zoran PETROVIC（セルビア）がそれぞれ選出された。

また、ある意味今大会のトピックとなるトリプルセブンのGAMBITの参加を許可するかどうかについて説明があり、CCCルールの「全てのサイズのグライダーはカテゴリー1大会開始

前、少なくとも30日以前にパイロットの手に入らなければならない」に抵触しているとのことで、競技委員長は参加不可とした。この決定を不服として、



パイロットブリーフィング。前列に廣川、呉本両選手。



150名が参加。10タスク中9タスクでゴール者が出た。



廣川選手、ゴール。日々、コンスタントにゴールを積み重ねることができた。

スロベニアチームからプロテストが出されたが、国際陪審はプロテストを否決する結果を出したため、GAMBITの参加は見送られた。

参加国は前回のイタリアより1か国増えて48か国。参加選手数は上限の150人。そのうち女子が21人と前回より5人増えた。日本チームは成山基義、呉本圭樹、廣川靖晃、平木啓子という顔ぶれ。

オーガナイザーの読みが的中

競技日として予定されていた11日間のうち、レストデイを除いた10日間で10タスクが成立。しかもストップになったタスクは1本もなく、ゴール者が出なかったタスクは1本だけという非常に充実した選手権となった。オー

ガナイザーの経験による気象予報の判断が功を奏したと言える。本来ならば連続して6本飛んだ後にレストデイを設けるのであるが、8日目の予報が午後後に前線通過となっていたので7日目にタスクを行い、8日目をレストデイとしたことがドンぴしゃりと当たった。

大会期間中、最も気がかりであったのが雲中飛行だが、期間中を通して積雲が発達したのは山沿いだけで、それも、数日のみ。ほとんどの日はほぼブルーに近い天候であったので、コンプレインはいくつか出されたが、全てペナルティまで与えられることもなく、プロテストに発展することなかった。最も多く出されたコンプレインはガーグル中のアグレッシブフライト（他の選手を妨げるような急旋回や反対方向

に旋回する等）に対するものであったが、全て警告どまりで収拾され、ペナルティが科せられることはなかった。

実際、空中接触は数件発生した。そのうちの一つは廣川選手がセンタリング中に追突されてラインを4本切ったものだが、フライトを続けてゴールした。大事故になったのは1件。片方の機体が破損してレスキューを開傘、事なきを得た。もう一方はそのままフライトを続けゴール近辺まで飛んだ。それ以外でレスキューの開傘は、フルアクセル中に強いサーマルにあたり潰れてツイストしたもので、計2件と少なかった。

チーム力を発揮した日本

今大会のチーム戦は、これまで同様、メンバー男子3+女子1の計4人のうち、上位2人の合計点で競うものであった。これまでの日本チームは、あるタスクで2人がゴールしない（あるいは高得点を取れない）ことがありチーム戦で低迷してきたのだが、今回は必ず2人以上がゴール（ゴール者ゼ



国別表彰。日本チームが銅メダル獲得。1位のフランスとイタリアは仲良く表彰台に上った。撮影：廣川絵美



個人総合表彰。イタリアのOberhauserが世界選手権者に。

口のタスクを除き) するというチーム力を発揮。また廣川選手がタスク7で世界選手権日本人選手初となるタスクトップとなったりして、銅メダルを獲得することができた。各メンバーが海外の大会に参戦し、雰囲気のにめなほに成長したことが大いに貢献していると思う。また、10タスクを終え、何と同点で金メダルをフランスとイタリアが獲得。これも世界選手権初の出来事。初物づくしの選手権となった。

日々のレース内容に関しては、JHFのPG競技委員会フェイスブックのレポートを参照してください。

<https://www.facebook.com/jhf.pgc/>

成績

[個人総合]

- 1位 Joachim OBERHAUSER
イタリア
- 2位 Gleb SUKHOTSKIY ロシア
- 3位 Honorin HAMARD フランス
- 7位 廣川靖晃
- 54位 呉本圭樹
- 75位 平木啓子
- 95位 成山基義

[個人女子]

- 1位 Meryl DELFERRIERE
フランス
- 2位 Yael MARGELISCH スイス
- 3位 Kari ELLIS オーストラリア
- 5位 平木啓子

[国別]

- 1位 フランス、イタリア
- 3位 日本

選手から

●廣川 靖晃

ついに国別で表彰台に上がることができて大変嬉しく思います。去年のアジア大会の金メダルに続き、大きな大会でメダルを獲得することができました。また、個人でも総合7位という成績を残せて満足しています。応援いただいた皆さま、本当にありがとうございました。

私も含め今回の世界選手権のメンバーはここ数年、頻繁に海外大会に参戦して経験を積み上げて来ました。今回はそれが結果に結びついたのではないかと思います。

夢の世界一を目指してこれからも挑戦し続けますので、応援よろしくお願いいたします。

●呉本 圭樹

最大のタスク数である10日間の戦いは、日本チームにとっても他国にとっても波瀾万丈のレースでした。その中で、強豪国を抑え、国別3位という結果が出せたことは本当に嬉しいものでした。

個人の戦績に関しては悔しいタスクがあり、胸を張れる結果とはなりませんでした。これも一つのタスクがゴールできていれば10番台と、本当に僅差の試合でした。

今回も多くの方に応援され、結果を出せたことがとても嬉しく、感謝の念に堪えません。次はもちろん、個人でも国別でも優勝を狙っていきます。

●平木 啓子

近年の世界の女子のレベルは、過去と比べ物にならないほど上がっており、優勝への道は相当困難なものとなっております。そんな状況でも諦めることなくアタックを続けましたが、敵いませんでした。ただ、まだまだ世界で戦える手応えを感じる事ができ、とても充実した大会となりました。また、日本チームは史上初の3位。大躍進を遂げた、日本チームの荣誉ある成績に貢献できたことを誇りに思います。

日本からたくさんの応援をいただき、日々励みになりました。ありがとうございました。

●成山 基義

10タスク全て成立でレース内容もとても濃いものでした。個人成績では納得のいく結果を出せませんでしたが、うまく噛み合えば試合運びやスピードそして勝負勘など、世界に通用すると確信を持つことができ、今後へと繋がったような気がします。

何より国別で3位、銅メダルを獲得できました。総合力のいる国別で表彰台に上がることを正直予想できていなかったのですが、日本の力が世界レベルに達したことを証明できて素直に嬉しいです。

いずれ日本が表彰台の真ん中に立つ！ 全パイロットと一緒に夢と希望を持ち今後も切磋琢磨していきたいと思っています。ありがとうございました。

第10回FAIパラグライディングアキュラシー世界選手権

厳しいコンディションで驚異のコントロール

9月8日-18日 セルビア共和国 Vrsac 報告: チームリーダー 岡 芳樹

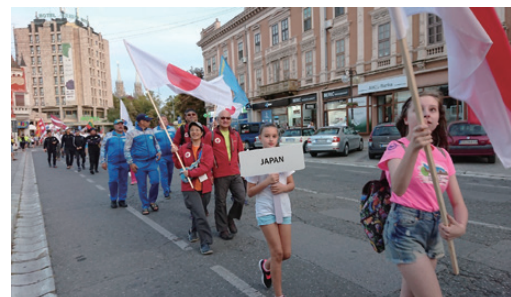
10回目を迎えたアキュラシー世界選手権は28か国が参加、選手は131人(うち女子22人)。日本からは岡芳樹(チームリーダー兼任)、古田岳史、川村眞、伊藤まり子が参戦。9日間のうち7日間競技を行い、9ラウンドが成立した。

大会会場のVrsacはセルビアの首都ベオグラードの北東75kmに位置する。エリアは市の中心から車で20分ほどの距離にテイクオフがあり、正面は北西向き。標高は400mで、まっ平らな平

野に4つほどの丘が連なった形の独立峰の最南端。ランディングまでの高度差は300m。アクセスも良いのでアキュラシーには向いている。テイクオフは一度に1機しか広げられないサイズでクロカンの大会には向いているとは言えない。

大会期間中、雨が降ったのは最終日となっていた18日だけ。それも朝方降った程度。それ以外は毎日ほぼ快晴のブルー。そのうちの1日が風向が常にフォローとなった以外は毎日フライ

トできた。しかし、時折テイクオフの風が不安定になったり強くなったりしてクローズセザるを得なかったり、バ



開会式パレード。日本チームの旗手は伊藤選手。



テイクオフポイントからランディングゾーン方向を臨む。

リパリのサーマルコンディションで翼端を折ってもどんどん上がるほどで、適切に降下手段ができない選手がかなりいたりして、スムーズにラウンドが進むことはあまりなかった。その結果、アクセスが良く、選手数が131人ではあったが、成立したラウンドは9ラウンドとなった。

飛べた日は、午前の早い時間はサーマルもなく絶好のコンディションだが、時間と共にサーマルが活発になり11時を過ぎるとバンバンに。その後、日が傾くにしがってサーマルは弱まり5時過ぎにはサーマルが無い状態になる。中日の14日はダストデビルがランディング近くで発生するほど荒れたコンディションとなって、心配されたが、事故もなく何とか無事に終了。期間中の事故は第4ラウンドで全く問題ないコンディションの中、最終アプローチでストールに入れハードランしたスロベニアの女子の1件だけ。その選手も翌日には復帰して飛んでいた。サーマルがきつくアキュラシー的には厳しいコンディションのわりに事故が無かったのは、選手のレベルが上がっ

てきたことも一因と思われる。

コンディションの厳しさは、地元のエースである現在WPRSランキング13位のゴラン・デュルコヴィッチが6回パッドを外し、その中に500点があるという大番狂わせで75位に沈み、今回個人金メダルを獲得した中国のウー・ヨンも500点を1回出し（成立ラウンドが5本以上となると最悪の1ラウンドを削除できるルールがある）、同じく個人銅メダルを獲得し、現在WPRS1位のスロベニアのマティアス・スルーガでも105点を出してしまうほど。それでも上位に名を連ねる選手は、きっちりとシングルスコアを出し続け、削除した点数が6点という選手もいるほどで、世界のレベルの高さを見せつけてくれた。

時間切れで全選手がフライトを完了できなかった第10ラウンドが成立していれば、このラウンドでウー・ヨン選手は500点を出しており最終結果は大きく変わり、しかもトップ3が同点となりタイブレークフライトの可能性もあっただけに残念な幕切れとなった。

なお期間中、コンプレインが数件(大

部分は同時侵入でターゲットを狙わなかったためのリフライトに関するもの)、プロテストが1件(韓国からの着地時にハーネスタッチがあったことに対するもの。国際陪審員は否決)提出された。

最後に、不甲斐ない結果でしたが、サポートしていただいたJHF、応援をしていただいた皆様に感謝いたします。

成績

[個人総合]

- 1位 ウー・ヨン 中華人民共和国
- 2位 イルヴァン・ウイナリア
インドネシア
- 3位 マティアス・スルーガ
スロベニア
- 93位 岡芳樹
- 97位 伊藤まり子
- 122位 古田岳史
- 126位 川村眞

[個人女子]

- 1位 ソヨン・チョウ 大韓民国
- 2位 ユンヨン・チョウ 大韓民国
- 3位 ジョージアナ・ビルゴズ
ルーマニア

- 11位 伊藤まり子

[国別]

- 1位 インドネシア
- 2位 中華人民共和国
- 3位 コロンビア
- 19位 日本

選手から

●岡 芳樹

今回の世界選手権は内陸部のエリアであったため、時期的には最も活発ではないにしろサーマルが非常に強かった。普段練習しているのが朝霧なのでそれなりにサーマルに対するコントロールができないわけではないが、正直全く歯が立たなかった。

不運なタイミングに当たれば世界のトップランカーでも外すほどではあるが、最終結果の上位者は最悪の1ラウンドを消せば18人が全ラウンドでパッドスコア。しかも小さいシングルスコアでないのが9ラウンド中1ラウンドあるのが数人、他は9ラウンド全てが小さいシングル。厳しいコンディションを考えれば驚異的なコントロールテクニックである。

世界のレベルは間違いだと嫌と言うほど思い知らされた。



ランディングゾーン。シングルスコア続出。



総合トップ3。中国のウー・ヨン選手が優勝。



女子優勝は韓国のソヨン・チョウ選手。



国別優勝に輝いたのはインドネシアチーム。

●伊藤 まり子

この度は貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。

大会期間中に自分の克服すべき弱点（風が弱いサーマル条件時のアプローチ：複数のアプローチ方法を持つことで心の余裕に繋げたい。また機体コントロールの荒さを何とか克服したい）が見つかり、これからの練習課題がはっきりと見えてきました。良かった点としては、集中力を高める方法のヒントを、少しだけ得たような気がしています。世界の選手達の、ものすごいレベルの技術を目の当たりにして、ここで対等に戦える技術と強靱なメンタルを追求したいと思いました。

今回の貴重な体験を活かして、これからの練習で技術的な課題を克服し、メンタル的にも「最後まで集中を切らさないために必要な何か」を、じっくりと探していきたいと思います。

●古田 岳史

今回の世界選手権に向け、2年前に同地で行われたワールドカップに参加して現地の特徴や状況を確認したり、サーマルコンディションに対応するため今年6月にカザフスタンで開催のブレ・アジア選手権やワールドカップ等に参加して経験を積み、準備を進めた。

しかし実戦では厳しいサーマルコンディションと風の方向の変化・強弱の変化に対応できず、結果を残すことができなかった。トップ選手はコンディションに関わらず落ち着いたグライダー操作でパッドの中心を正確に踏む姿に非常に安定感があり、レベルの差と共にアキュラシー競技の奥深さを感じた。

この経験を来年のアジア選手権や2年後の世界選手権に向け、抜本的に基礎から練習を見直し、更なるレベルアップを図りたいと思う。

●川村 眞

今回は個人20位以内を目標にしていました。チーム戦は、4人の参加しかなく、上位4人の合計で競われるため一つのミスもできない状況でした。

第1ラウンドは、何とか10cmを出して上々のスタートでしたが、2ラウンド目から風とサーマルに翻弄されたアプローチができなくなり、修正しようと頑張りましたが、1本のミスも許されないプレッシャーが大きく、さらに判断を遅らせるミスが重なりました。同じような状況の、多くの選手はちゃんとスコアを出しています。

今後は、何が自分に足りないのか、同じような状況でもスコアを出すためには何をしたらよいのか、課題が沢山できました。今回の失敗を今後に生かせるよう練習に励みたいと思います。ありがとうございました。

2019ハンググライディング日本選手権 in 足尾

田中元気、谷古宇瑞子、日本選手権を勝ち取る！

9月19日-23日 茨城県石岡市足尾山フライトエリア 報告：実行委員長 板垣 直樹

平成から年号が令和に変わり最初のハンググライディング日本選手権者が今大会によって生まれた。

台風17号の接近により成立が危ぶまれたが、9月19日から23日までの5日間で最終日を除く4本の競技が成立した。

初日●19日

木曜日は朝から晴れて風も良く、気温減率は良くないものの日照のお陰でしっかりと気温が上がりサーマルは強くはないが活発な条件となった。

足尾ハンググライディング（2.4km）—B28サル公園1kmスタート—（25.2km）—B05鬼怒大橋—（16km）—ZLG関城ULPゴールの44.3kmのタスク。スタートは12時30分からのエラップスタイム。

テイクオフ場は風が良く、全選手がスタートゲートオープン前に飛び出し、ほとんどの選手が1回目の12時30分にそろってスタートのレースとなった。

このタスクはスタート後の最も長い鬼怒大橋までのコース取りが鍵となり、スタート直後に西側平地に出たグループと加波山方向の山並みを行くグループに別れた。

結果的には直で平地に出た、いま最も活きの良い若手選手の名草が、鬼怒大橋をとった後のゴールまでの弱いヘッドウインドをものともせず、2位以下に5分の差をつけトップゴールを飾った。

2日目●20日

2日目も朝から良く晴れ、この日も

好条件の期待が高まるが、テイクオフ場は朝から西風となり気温減率は昨日より悪く渋い条件だ。

タスクは、足尾ハンググライディング（2.6km）—C02雨巻山13kmスタート—（5.1km）—B27猿鉄塔—（8.8m）—B17難台山—（4.4km）—B32龍神山—（15.7km）—B06飯田ダム—（4.6km）—ZLL内原ゴールの41.2km。

テイクオフオープン後も風が不安定でダミーは西に出るが上がりず誰も飛び出せない時間が続いた。

そんな中、東に出た選手が上げ始めるが、どっちつかずの風で更に待ったあと大半の選手は西に飛ぶが上げられず、降りる選手の方が多かった。

タイミング良く上がった選手は僅か



機体をセットアップしてタスク発表を待つ。



4本中3本でゴール者が出た。



台風の影響が心配されたが4本成立という結果に。撮影：杉山祥一

な晴れ間を目指して駒を進め、岡田をトップに4人の選手がゴールした。42人の選手の内、ミニマムを越えたのは13人だけだった。

3日目●21日

朝は少し小雨が降り曇り空、東風がやや強いものの減率悪く期待薄の天気。

タスクは、足尾ハングテイクオフー(2.2km)ーB34不動峠8kmスタートー(3.3km)ーNG2風車ー(3.3km)ーB27サル鉄塔ー(3.6km)ーZLG関城ULPゴールの28.9km。

風は良くテイクオフオープン後、次々と飛び出す選手。しかし曇り空でほとんどの選手は少し粘るだけでラン



総合入賞者。田中選手がスピードで選手権を獲得。



女子入賞者。ベテランの谷古宇選手が表彰台中央に。

ディング。

5人がミニマム距離6kmを越えるが得点は全員一律の2点で終わった。

4日目●22日

朝から晴天だが、台風17号の影響で午後から曇る予報で、減率も悪くサーマルは期待できない状況で山に上がった。しかし台風が停滞し晴れ間がもって11時テイクオフオープンでタスクが組まれた。

足尾ハングテイクオフー(2.2km)ーB34不動峠8kmスタートー(3.3km)ーNG2風車ー(3.2km)ーB27サル鉄塔ー(5.7km)ーC13友部ICー(23.6km)ーZLG関城ULPゴールの38.6km。

テイクオフオープンが早かったこともあり、10人以上の選手がミニマムを越えられずにランディングした。

スタートは大半の選手が1回目の11時30分。

荒れた山並みの往復を集団で進み西側平野でも弱めのサーマルをうまく乗り継ぎ、最後は鈴木選手が抜け出してトップゴールを決めた。



学生1位の深沢選手。

最終日●23日

台風17号の接近により朝は曇り、晴れてからは南西の強風となり競技キャンセル。5日間の大会の幕を閉じた。

今回はベストなコンディションではなかったが4日間飛ぶことができた。

ゴールを3本揃えた岡田・砂間を抑えて、2本ゴールのスピードで田中が令和最初の選手権者となった。

ここ数年、田中は中堅の中で一人抜けて勝率を上げてきたが、今回もその実力と勝負強さを十分に発揮したと言える。

女子日本選手権者は、接戦をそのマイペースで飄々と制した谷古宇が初の栄冠を手にした。

初日の名草を筆頭に20代の若手の参加も増え、今後のハンググライディング競技を盛り上げていきたい。

成績

[総合]

1位 田中 元気 大阪 2048点
2位 岡田 伸弘 静岡 2016点



「5日間、お疲れさまでした！」

3位 砂間 隆司 愛知 1955点
4位 鈴木 由路 東京 1929点
5位 氏家 良彦 兵庫 1873点
6位 石坂 繁人 茨城 1868点
[女子]

1位 谷古宇瑞子 栃木 900点
2位 内田 秀子 東京 891点
3位 櫻井さやか 栃木 838点
[学生]

1位 深沢 拓人 東京 950点

日本選手権者から

田中 元気

4年ぶり2度目の日本選手権者になったことを非常に嬉しく思っています。

今年は年間を通して成績好調で、イタリアでの世界選手権でも良い調子でフライトできていました。グライダーも調子良く、自分のハンググライダーの腕を磨いてくれた故郷である茨城県

足尾山での日本選手権でしたので、しっかりと飛びきれて嬉しかったです。

勝因は、世界選手権で自分のフライトに自信が付いたことが大きいかと思います。判断力や、テクニックに自信が付いたことで、フライトを通じて焦らずに判断し、行動できたため、自ずと結果が付いてきました。

空を飛ぶことにおいてメンタルは非常に大きな要素の一つで、重要なことだと思っています。少し心が揺らいでいたり、焦っていたり、欲が出たときには大抵いい結果には結びつきません。これからも冷静な判断で飛び続けられるように心掛けていきたいと思っています。ありがとうございました。

谷古宇 瑞子

長い間大会に参加していますが、タイトルとは無縁でしたので嬉しいです。

開催地の足尾山は慣れ親しんだエリアですが、今回は高度制限があり、慎重に飛ぶ必要がありました。モザイク状の制限高度は初めてで難しく感じましたが、なんだか面白かったです。

どの大会でも開催者が事前によく準備してくださり、自分はワクワクしながらエリアに行くだけで、十分な気象情報やサポートを提供いただけるうえに、空では優れたパイロット達と飛ぶことができます。私はそれが楽しくて、ずっと大会に出ています。

一方、どんな条件でもゴールする選手がいる中で、今回のように一度もゴールにたどり着けなかったことは今後の課題。大会での経験をフリーフライトにも活かし更に飛びを充実させたいです。そして女子選手は少ない中でも、競い合ってレベルを高めていけたら、と思います。有難うございました。

PG日本男子チームに文部科学大臣表彰状

大人が夢を見られるスポーツに



表彰状を手にする日本男子チーム。右端が大山拓也さん。

7月23日（火）、東京都千代田区のホテルニューオータニにおいて、文部科学省・スポーツ庁「スポーツ功労者顕彰、国際競技大会優秀者等および、ユースオリンピック競技大会優秀者等の大臣顕彰・表彰」の顕彰・表彰式が行われた。これは、前年度にスポーツ国際大会で優秀な成績を収めた選手及びその指導者、その選手を多年にわたり支援した団体等に対し、文部科学大臣がその功績を讃えるもの。今回、選手・指導者のべ905名、功労団体17団体、審判員4名が受賞。スカイスポーツでは初めて、第18回アジア大会（アジア競技大会）パラグライディング団体で金メダルを獲得したパラグライダー日本男子チーム（*）に表彰状が授与された。

「アジアのオリンピック」といわれるアジア大会は、アジアオリンピック評議会（OCA）が主催するオリンピッ

ク関連の国際競技会。日本選手団を結成し派遣するのは日本オリンピック委員会（JOC）だ。その大会で金メダルを獲得することの重みを、選手はもちろん、パラグライダーチームの派遣についてJOCとの協議にあたり、またチームリーダーとして参戦した日本航空協会（JAA）航空スポーツ室長の大山拓也さんも日々感じているという。後日、大山さんにお話をうかがった。

「アジア大会日本選手団の50を超えるスポーツ組織のなかで我々は一番の新参。多数の有名アスリートとともに壮行会に参加して、身の引き締まる思いでした。競技会場が離れていたので開会式に出られなかったのですが、行きの飛行機が桐生選手たち陸上チームと一緒に、パラグライダーのメンバーも『日本を背負って戦うのだ』という気持ちでさらに高めることができました。結果は、男子金メダル1個と女子銀メダル1個。JOCに対しても、十分に胸を張れる結果を残せました。」

いつもはライバルどうしの選手たちが、ともに生活して、一緒に国を背負って戦うという意識を持って、チームになってくれた。お互いにカバーし合って、本当に素晴らしいと思いました。

チームリーダーとして何もできなかったんですが、JAAがJOCへの窓口となることで、引き続きアジア大会で、またオリンピックでパラグライディングという競技が選ばれる、今後のための一歩目は踏み出せたかなと思います。

航空スポーツを知る人はまだまだ少なく、パラグライディングも『どのような競技なのか？』というところから始まりますから、私たちは裏方として地道にコツコツとやっていくしかない、そう考えています。

アスリートとしてのピークが10代から20代という競技が多いなかで、パラグライディングのように大人になってから始めてもメダルを狙える競技というのは珍しい。射撃とかアーチェリーもそうでしょうか。10代から競技一色ではなく、普通に社会に出ていい大人になってから始めても、もしかしたらメダルに手が届く……そんな『大人が夢を見られるスポーツ』になるといいですね、航空スポーツが。」

* [日本男子チーム]

チームリーダー：大山拓也（一般財団法人日本航空協会）

監督：岡芳樹

選手：岩崎拓夫、呉本圭樹、上山太郎、廣川靖晃、中川喜昭

第42回鳥人間コンテスト トライアングル60km翔破、渡邊悠太が人力プロペラ機部門優勝！

7月27日・28日 滋賀県彦根市琵琶湖松原水泳場 報告：山本 貢

第42回を迎えた鳥人間コンテスト。今回は、台風あり大記録ありの波乱万丈な大会だった。

7月27日。台風が間近まで迫る予報により、運営側は限界まで選手を飛ばせることに懸命になる。選手たちは、機体についた雨粒を懸命にふき取りながら、風がやむわずかなタイミングを狙って次々とテイクオフ。しかし、天候が天候だけに、なかなか良い記録が出ない…。

そうこうしているうちに、長時間雨に打たれて「低体温症」で本部に担ぎ込まれる選手も…。「熱中症」には十分な対策を取っていた大会運営側も、まさか、真夏に「低体温症」の患者が出ることは予測がつかなかった。

こんな条件の中でも、Umeda Labチームが327メートルを飛び、滑空機部門の優勝を飾る。

翌28日は、早朝から人力プロペラ機

部門の競技となる。

各チームとも、台風でのスケジュール変更の中、フライト準備に手間取ってしまう…。飛行順番の入れ替わりなどのトラブルがあったものの、気象条件自体は、台風一過で風もなく絶好のコンディション。選手たちは、順調にその競技を続けることができた。

この好条件のなか、日大理工学部が学生記録となる38,010メートルの大記録を作る。もちろん日大理工学部としても最高記録。会場は湧いた。

最後は優勝最有力候補の、BIRDMAN HOUSE伊賀の渡邊氏。

正直、彼の機体は他のチームと比べて1ランク以上出来栄が上である。今までのトップクラスの人力機よりも、更に10キロほど軽くできていながら、十分な剛性も持っており、その操縦性も優れたもの。審査員の皆さんも、何故このような機体が作れるのか首を

かしげるほどであった。

順調に飛行を続ける渡邊氏。彼の機体は、それまでは「飛ぶのが精いっぱい」だった人力機が、「余裕をもって飛べる」人力機へと変わっていた。そのため、鳥人間コンテスト史上初めて、「飛びながら休むスタイル」をとることができた。

飛行に余裕があるため、高度が高くなったら「ペダルを漕ぐのをやめて滑空」することができたのである。

彼はこの飛び方で、何度か休みながら、新ルールの「トライアングル60キロ」の距離を飛びきって、再び会場に帰って来たのである。

もちろん人力プロペラ部門の優勝は渡邊氏。正直、しばらくは彼を超える選手は出てこないのではないか？と思える。

今回の大会では、初日に低体温症の選手を出してしまったのは、運営側の大きな反省点…。しかし、その気象条件を120パーセント使い切って、滑空機部門の選手を飛ばせることもできている。今後は、このようなアクシデントがあった場合、バランスをどのように取っていくかが「課題」となるであろう。

*JHFは鳥人間コンテストに協賛しています。



台風の中プラットフォームに現れた虹。



人力機部門優勝の渡邊氏。

県連だより 2

■いきいき茨城ゆめ国体デモスポ開催 茨城県ハング・パラグライディング連盟

9月8日（日）に「いきいき茨城ゆめ国体2019」のデモンストレーションスポーツとして、ハンググライダー大会を足尾エリア（nasa）、パラグライ



開会式。ハング・パラ両方の選手が集合。

ダー大会をCooエリアで、JHFとJPAが協力して開催、天候にも恵まれ無事に終了した。

参加選手は、ハングが21人、パラが34人。競技内容としては、タスク距離を短くし、誰でも参加し易いよう敷居を低くしたパイロンレースを行った。更に、普段は競技に出ないパイロットも参加できるように、使用機体に応じたハンディキャップを付けた。

ハングのハンディキャップは、同じパイロンを周るが、アトスはシリンダー300m／スポーツ機は2200mという具合。一番長いアトスクラスで31km、スポーツクラスで17kmのタス

クと一緒に飛び、同じ計算式で集計するものだ。

ハングは地元、牟田園選手がツノ無しクラスの30kmを20分40秒のトップタイムで優勝。2位に太田選手、3位に小椋選手と続き、最後は1時間10分かけてスポーツクラスの浅田選手がゴールし、参加選手の半数以上の12人がタスクコンプリートした。女子優勝は野尻選手。

パラは3クラスが同じタスク。機体によってクラス分けし、「機体のA・Bまたは競技初心者Cクラスまで」が20.2km、Cクラス22.8km、D&CCCクラスが25.9kmのタスクでレースをし、



誰でも参加し易いように短距離のパイロンレースを行った。



ハンググライダー入賞者。牟田園選手が優勝。



パラグライダー入賞者。優勝は荒井選手。



ハンググライダー女子優勝は野尻選手。



パラグライダー女子優勝は中目選手。

22人がゴールした。

パラの優勝は荒井選手、2位に虎井選手、3位に中目選手、4位菊田選手、5位食堂選手、6位齋藤選手。女子優

勝は中目選手。

今回は国体デモスポだからと初めて競技に参加した選手も多かった。ハング・パラの両方でレースを行ったこと、

JPAとJHFの垣根を越えての開催にはさまざまな意見があるだろうが、私は良かったと思うし意義は大きかったと思う。（茨城県連理事長 板垣直樹）

学連ニュース

日本学生フライヤー連盟理事長の墨です。今年度開催した学連のイベントの中から2つを抜粋して報告します。

■2019年度パラフェスタ in 獅子吼

6月29日・30日に石川県獅子吼高原エリアにてPGの学生大会「パラフェスタ in 獅子吼」を開催しました。学生競技人口を増やすため、学生大会としては新しいエリア、獅子吼高原で開催する運びとなりました。本来は6月15日・16日の予定でしたが、低気圧発達による天候不良が見込まれ、順延とし



参加者全員でターゲット競技に熱くなる。



残念な天候だったが得るものは大きかった。

ました。順延により参加できなくなった選手には深くお詫び申し上げます。

順延しても怪しい予報でしたが、初日に全員がフライト。コンペコンディションとはならず、参加者全員でターゲット競技を行いました。大会は不成立でしたが、新しい開催地ということもあり、参加者からは来年以降も開催してほしいとの声が強く、開催に向けて動ければと思います。

大会開催にあたり、獅子吼高原パラグライダースクールの山口隆文校長には大変お世話になりました。また、福井県立大、金沢大の学生にも運営に協力していただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

■2019年度鳥取砂丘合宿

9月2日～5日に鳥取砂丘にてHG、PGの合同合宿を行いました。毎年100人を超える、最大の学連イベントです。鳥取砂丘は安定した海風が入りやすく地面も砂で、初級者講習にはうってつけのエリアです。昨年度は台風の影響により中止となりましたが、今年度は全日講習を行うことができました。

初日午前中は悪天候のため、午後から開会式と座学の予定でしたが、昼頃から天候が回復し、砂丘で講習を行いました。3日目にはHG、PGそれぞれ練習の成果を確かめるためにミニゲームを行いました。HGはレベルに合わ



HGグラハンレース。練習の成果を披露する。



参加者集合。今回も内容の濃い砂丘合宿だった。

せてグラハンレースとターゲットに分かれ、PGはグラハンレースで競いました。また、夜のレセプションで全国の学生が交流。最終日は鳥取砂丘の保護のため除草作業を全員で行い、安全講習会ののち、閉会式で終わりました。

4日間、厳しい暑さの中、親身に講習を見てくださったインストラクターの皆様、本当にありがとうございました。また、開催にあたり、準備、迅速な運営をしてくださった関西支部の皆様、ありがとうございました。

JHFからのお知らせ

■チェック5タグを頒布

JHFではハンググライディング・パラグライディングの事故撲滅を目指して「空の事故ゼロキャンペーン」を実施しています。昨年は全国のフライヤー会員の皆さんに「チェック5タグ」をお届けしました（JHFレポート222号に同封）。それぞれタグを活用し、プレフライトチェックの徹底に役立てておられることと思います。

このタグをご希望の方は各地のJHF登録スクールでお求めください。

JHF事務局から直接お送りすることもできます。1セット300円（送料込み）。メールかFAXにてご連絡ください。

今後も「チェック5タグ」を装着し、フライトの基本中の基本、プレフライトチェック、クロスチェックを徹底されるようお願いします。

■JHF備品を貸し出しています

JHFでは備品の貸し出しをしています。ご希望の方は、JHFウェブサイトの「JHFのご案内」→「無線機その他備品貸出」ページより貸出依頼書をダウンロードし、必要事項を記入・入力の上、メールかFAXでお申し込みください。

■転居のお知らせや各種申し込み

お問い合わせはJHF事務局へ

公益社団法人

日本ハング・パラグライディング連盟

〒114-0015 東京都北区中里1-1-1-301

TEL.03-5834-2889 FAX.03-5834-2089

E-mail:info@jhf.hangpara.or.jp

https://jhf.hangpara.or.jp/

*このJHFレポートには、賛助会員からのお知らせを同封しています。また、神奈川県在住の方には県連盟からのお知らせも同封しています。

被災地復興 応援プロジェクト 「空はひとつ」

東日本大震災被災地への義援金を引き続き募っています。

◇義援金振込先

三菱UFJ銀行（銀行コード0005）

巣鴨支店（店番号770）

口座番号 普通 0017991

口座名義 公益社団法人日本ハング・

パラグライディング連盟

JHFレポート227号

発行日：2019年（令和元年）10月20日

発行：公益社団法人 日本ハング・パラグライディング連盟（JHF）

編集：JHF事務局

印刷：株式会社サンライズ



スポーツくじの収益は、
日本のスポーツを育てるために
使われています。

スポーツくじ BIG

www.toto-dream.com www.toto-growing.com

※19歳未満の方の購入又は譲り受けは法律で禁じられています。払戻金も受け取れません。
運営・販売：独立行政法人日本スポーツ振興センター

上空利用可能デジタル無線機 使用のお勧め

2022年にアナログ式簡易無線機の運用が終了することに備えて、JHFではハンググライダーやパラグライダーのフライト中に使用する無線機として「簡易無線登録局」対応のデジタル無線機の使用を推奨しています。

上空利用5チャンネルを搭載、デジタル方式の音声なので、混信もすくなくクリアーで聞き取りやすくなっています。現在の対応機種はSTANDARD製のVX-291S、VXD450S、VXD1S、ICOM製のIC-DPR30、KENWOOD製のTPZ-D510です。

JHF賛助会員（JHFウェブサイト）にバナーを掲載）からも購入することができます。

なお、JHFではSTANDARD製デジタル無線機を15台保有し、フライヤー会員に貸し出しをしています。ご希望の方はJHFウェブサイトの「JHFのご案内」をご覧のうえお申し込みください。

すでにデジタル無線機をお持ちの方は、無線機の登録手続きを済ませ利用料を納めているか、ご確認ください。登録をしないまま無線機を運用すると、不法無線局として処罰の対象になります（1年以下の懲役または100万円以下の罰金）。うっかり忘れていたということのないようお願いします。